

# 中2 スマホが生命線

## ここにいるよ

### 沖縄 子どもの貧困

②

#### 第1部 群像

「今日車あるよ! 遊ぼう。」  
放課後、中学2年のユウカ(14)はLINEでグループトークに呼び掛ける。

メンバーは同じ中学の同級生や高校生の彼氏、中学の先輩を通じて知り合った友人たちだ。よく北谷町美浜や那覇市をドライブする。帰宅は深夜を過ぎることも多い。

小学3年の時に両親が離婚してから、30代の母親は働きづめで顔を合わせて会話をすることも減った。ユウカが夜、遊び歩いていることを知っているかどうかも分からない。父親には、離婚後数えるほどしか会っていない。

LINEで集まる年上の友人たちは、バイトや仕事をしてい

てファストフード代もプリクラ代も出してくれる。そんな彼らを「優しくて面白い」と話す。

ユウカの財布に入っているのは、母親がたまに持たせてくれる1週間分の食費、千円か二千円。コンビニでパンやおにぎりなどを買ってしまえば、それで終わりだ。

母親と過ごせない時間を埋めてくれるのは、遊びに連れ出してくれる友人たちだ。その上、空腹も満たしてくれる。

ユウカと友人をつなぐ「生命線」はスマートフォン。必死にねだって買ってもらったものの、料金滞納で「不通」になることもよくある。「また不通なあ、って。むかつくし泣きたくなる」

また不通って泣きたくなる

公営住宅に母娘2人暮らし。母親は夕方から居酒屋の仕事に出て、朝方まで戻らない。居酒屋の仕事が休みの日は別の飲食店でも働いている。

いつも家にいない母親に、あ



スマートフォンを通して友人とつながるユウカ(北谷町美浜)

すと「ごはんはお金があるときにまとめて買ってくる」と怒鳴られた。それ以来、日中は寝ている母親に食事の世話を求めるのはやめた。

会わない日が続くと食費が渡されなくてもあるが、疲れた様子の母親を見ると「お金が欲しい」と頼む気になれない。手持ちのお金がなくなった時に一度だけ、先輩が勤めているスナックを手伝ったこともあった。

「一緒に遊んでる友達も母子家庭だったり、中卒でバイトしたりしてる。みんな同じだよ」と隣にいた友人と顔を見合わせながら笑う。

母親を責めても状況は変わらないと分かっている。休みもなく働く母親をかわいそうに感じることがある。中学を卒業したら働く決めてる。

「何の仕事だったらできると思う?」。高校に進学した方が将来のためになることは分かっているが、厳しい現実には、夢や希望が持てなくなっている。

(「子どもの貧困」取材班・松田麗香 (文中仮名))

火く木曜日掲載

記事に関するご意見、情報をお寄せください。

ファクス: 098(860)3483 メール: kodomo-hinkon@okinawatimes.co.jp